

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-132	13-039	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Underage drinking: prevalence and risk factors associated with drinking experiences among Argentinean children. 未成年における飲酒：アルゼンチンの子供における飲酒経験と罹患率、リスク因子の関連		
<b>執筆者</b>		
Pilatti A, Godoy JC, Brussino S, Pautassi RM.		
<b>掲載誌</b>		
Alcohol. 2013 Jun;47(4):323-31. doi: 10.1016/j.alcohol.2013.02.001. Epub 2013 Apr 13.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
未成年、アルコール消費、飲酒率、リスク因子		23591270
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b> 未成年者における飲酒行為と飲酒率、予測因子の関連を示す。</p> <p><b>方法：</b> アルゼンチンの Córdoba 市在住の 8 歳から 12 歳の子供 367 名 (平均 10.44 歳、標準偏差 1.21 歳、女性割合 61.9%) を対象とした。リスク因子を検証するために①アルコールに対する期待や飲酒したことによる結果をどのように考えているかを含む被験者の人格的特徴および②飲酒や飲酒体験に対するアルコールに関する理解について把握する複数の尺度が用いられた。アルコール消費量に関する複数のリスク因子の寄与を決定するために階級回帰分析が用いられた。</p> <p><b>結果：</b> 58%の子供がアルコールを試したことがあると回答し、約 3 分の 1 の子供が初回飲酒以降に再度飲酒したと回答した。12 歳の子供においては 12 歳未満の子供に対してアルコールを試したり飲んだりした割合が有意に高く、有意に頻回にかつアルコール消費量が多かった。初回飲酒でアルコールを好んだ子供の 80%において再度飲酒を行ったと回答した。初回の飲酒でアルコールを好まなかった子供では 31%しか再度飲酒を行わなかった。未成年の飲酒は家族の大人による監督下で起こり、両親や親戚が子供の飲酒を許したり、知っている状態で起こった。階級回帰分析の結果、高い年齢、また女性よりも男性であること、アルコールを飲む周囲の仲間が多いこと、社交性の高さ、社会的簡便性による飲酒を見込める境遇によってアルコール消費に対するリスクが増大することがわかった。解析モデルにより分散全体の 33%が説明できた。</p> <p><b>結論：</b> 年齢、男性、周囲の環境、社会的な性格などにより飲酒リスクが増大することが示された。</p>		